

ココンマ圏と profunctor

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

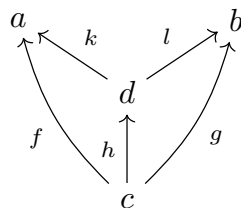
2019年6月16日

これまで見てきた通り、圏論ではコンマ圏が非常に重要な役割を果たす。そうすると気になるのは、コンマ圏の双対となる「ココンマ圏」は存在するのであろうか、ということである。

定義. 圏 C の図式 $a \leftarrow c \rightarrow b$ を a から b への span という。双対的に、図式 $a \rightarrow c \leftarrow b$ を a から b への cospan という。

定義. C を圏, $a, b \in C$ を対象とする。 a から b への span がなす圏 $\text{Span}(a, b)$ を以下のように定める。

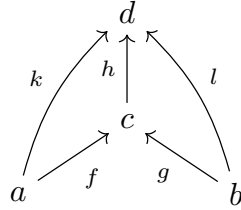
- $\text{Ob}(\text{Span}(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xleftarrow{f} c \xrightarrow{g} b\}$
- $\langle f, g \rangle, \langle k, l \rangle \in \text{Span}(a, b)$ とする。 $c := \text{dom}(f)$, $d := \text{dom}(k)$ とする。 $\langle f, g \rangle$ から $\langle k, l \rangle$ への射は、次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow d$ で定める。



同様にして cospan がなす圏 $\text{Cospan}(a, b)$ が以下のように定まる。

- $\text{Ob}(\text{Cospan}(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xrightarrow{f} c \xleftarrow{g} b\}$
- $\langle f, g \rangle, \langle k, l \rangle \in \text{Cospan}(a, b)$ とする。 $c := \text{cod}(f)$, $d := \text{cod}(k)$ とする。 $\langle f, g \rangle$ か

ら $\langle k, l \rangle$ への射は、次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow d$ で定める.

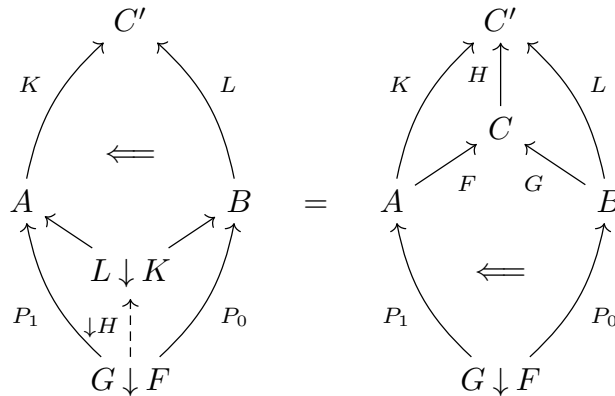


ここでは圏の圏 \mathbf{Cat} における span, cospan を考える.

$A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ を \mathbf{Cat} の cospan としたとき、コンマ圏 $G \downarrow F$ は span $A \leftarrow G \downarrow F \rightarrow B$ を与えるのであった.*1

命題 1. コンマ圏を取る操作は関手 $\downarrow: \mathbf{Cospan}(A, B) \rightarrow \mathbf{Span}(A, B)$ を与える.

証明. $H: (A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B) \rightarrow (A \xrightarrow{K} D \xleftarrow{L} B)$ を $\mathbf{Cospan}(A, B)$ の射とする. このとき関手 $\downarrow H: G \downarrow F \rightarrow L \downarrow K$ をコンマ圏の普遍性により定める.



普遍性により、これは明らかに関手 $\downarrow: \mathbf{Cospan}(A, B) \rightarrow \mathbf{Span}(A, B)$ を与える. \square

そこで、もしこの関手が左随伴を持つとすると、それが「ココンマ圏を与える関手」であるとみなすことができる. というのも「コンマ圏の普遍性」の双対バージョン (定理 2) が成り立つからである.

それを説明するため、関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \mathbf{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Cospan}(A, B)$ を持つとして、その unit を η とする. $A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ を span とすると $\uparrow(A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B)$ は cospan であるから、それを $A \xrightarrow{Q_0} F \uparrow G \xleftarrow{Q_1} B$ と書くと、これのコンマ圏を考えることができる.

*1 後の構成の都合上、 $F \downarrow G$ ではなく $G \downarrow F$ を考える. ここを $F \downarrow G$ にしたい場合、後で出てくる $\mathbf{Prof}(A, B)$ を $\mathbf{Prof}(B, A)$ にする必要がある.

このとき $S := \eta_{A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B}$ は $\text{Span}(A, B)$ の射 $C \rightarrow Q_1 \downarrow Q_0$ (次の図式の点線の射) のことである (ここで P_0, P_1, θ はコンマ圏 $Q_1 \downarrow Q_0$ から得られる関手と自然変換である).

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow P_1 & \swarrow \theta & \uparrow Q_1 \\
 & & Q_1 \downarrow Q_0 & \xrightarrow{P_0} & B \\
 & & \uparrow & & \uparrow \\
 C & \xrightarrow{F} & & & \\
 & \searrow S & & & \nearrow G \\
 & & & &
 \end{array}$$

そこでこの合成により得られる自然変換を $\rho: Q_1 G \Rightarrow Q_0 F$ とする.

定理 2. 関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \text{Span}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ を持つとする. このとき上のように定義した図式

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 \uparrow F & \swarrow \rho & \uparrow Q_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

は次の普遍性を満たす: X を圏, $R_0: A \rightarrow X$, $R_1: B \rightarrow X$ を関手, $\alpha: R_1 G \Rightarrow R_0 F$ を自然変換とする.

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{R_0} & X \\
 \uparrow F & \swarrow \alpha & \uparrow R_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

このとき関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が一意に存在して以下を満たす.

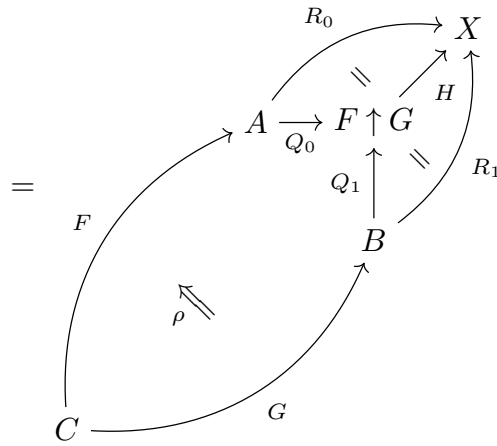
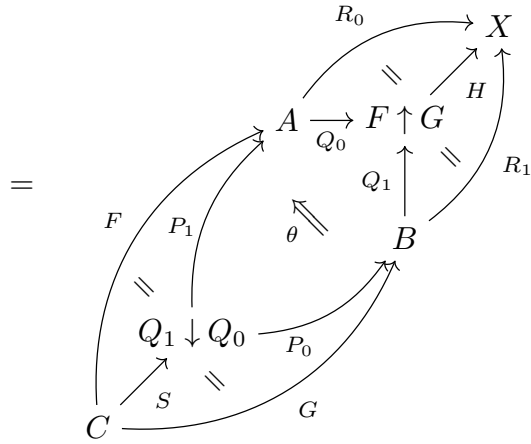
- (1) $HQ_0 = R_0$, $HQ_1 = R_1$ である.
- (2) 次の自然変換の等式が成り立つ.

$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow F & \swarrow \rho & \uparrow Q_1 \\
 & & C & \xrightarrow{G} & B \\
 & \searrow H & & & \nearrow R_1 \\
 & & & &
 \end{array}
 & = &
 \begin{array}{ccc}
 & & X \\
 & & \uparrow R_1 \\
 & & C \xrightarrow{G} B \\
 & \swarrow \alpha & \\
 & & A \xrightarrow{R_0} X
 \end{array}
 \end{array}$$

証明. まず H の存在を示す. そのためにコマ圏 $R_1 \downarrow R_0$ を取り, そこから得られる関手と自然変換を P'_0, P'_1, θ' とする. 普遍性により次の図式の点線の関手 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が得られる.

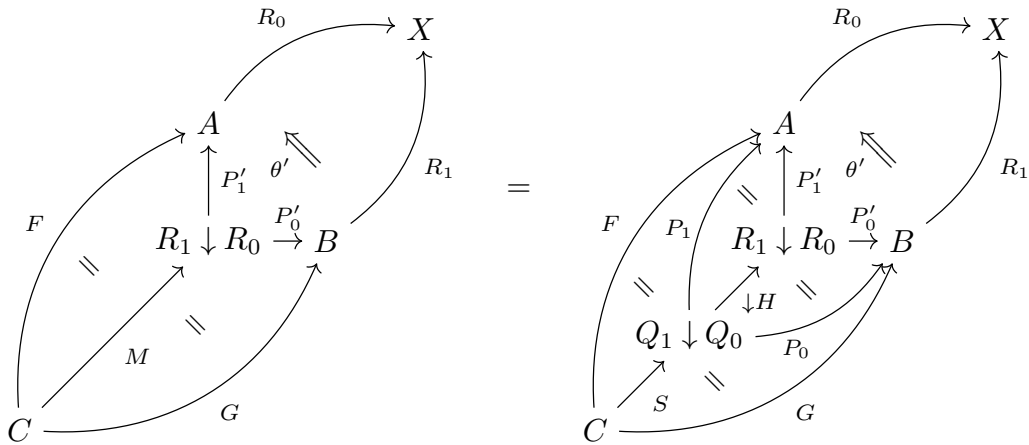
このとき随伴 $\text{Hom}(F \uparrow G, \langle R_0, R_1 \rangle) \cong \text{Hom}(\langle F, G \rangle, R_1 \downarrow R_0)$ により, M の随伴射となる関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が取れる. これが条件 (1)(2) を満たすことを示す.

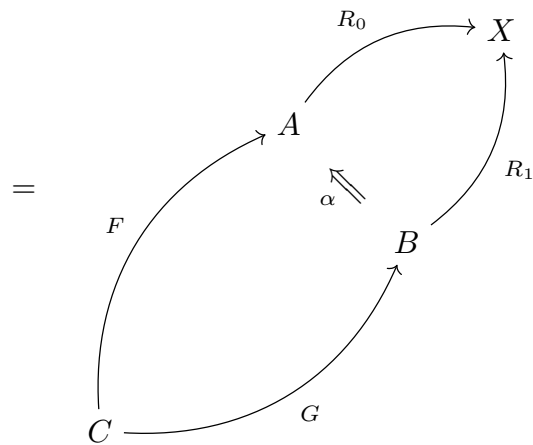
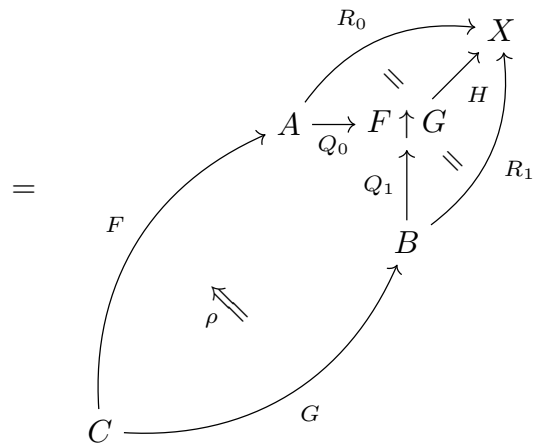
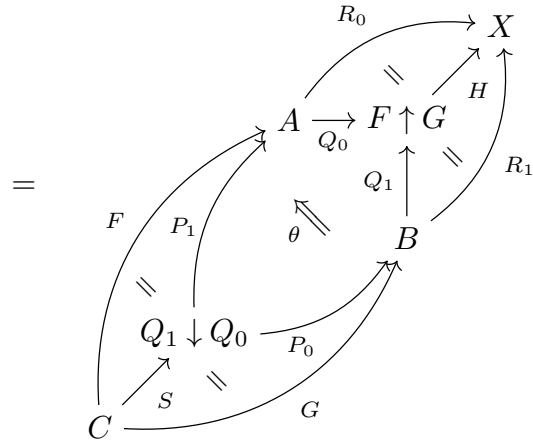
まず条件 (1) は, 定義より H が $\text{Cospan}(A, B)$ の射であるからよい. 条件 (2) を示そう. 随伴の unit の性質から $\downarrow H \circ S = M$ が成り立つ. 従って



となり条件 (2) が成り立つ.

後は H の一意性を示せばよい. H が条件 (1)(2) を満たすとすると H は $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $F \uparrow G \rightarrow X$ だから, 随伴射 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が取れる. 従ってこの M が一意であることを示せばよい. 再び unit の性質から, これは $\downarrow H \circ S = M$ を満たす. 故に





となるから、 $R_1 \downarrow R_0$ の普遍性により M は一意である。 □

そこで問題は $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ が左随伴を持つか、ということになる。答えは存在する、であるが、これを構成するために profunctor というものを導入する。

定義. C, D を圏とする. C から D への profunctor (もしくは distributor もしくは correspondence もしくは bimodule) とは関手 $F: C \rightarrow \widehat{D}$ のことである. profunctor を記号 $F: C \multimap D$ などと表す.

自然同型 $\text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A \times B, C) \cong \text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A, C^B)$ により, profunctor $F: C \multimap D$ 即ち関手 $F: C \rightarrow \widehat{D}$ と関手 $F: D^{\text{op}} \times C \rightarrow \mathbf{Set}$ を同一視することができる. 以下, 特に断らずこの同一視を行う. また C から D への profunctor がなす圏を $\mathbf{Prof}(C, D) := \mathbf{Set}^{D^{\text{op}} \times C}$ で定める.

定義. profunctor $F: A \multimap B, G: B \multimap C$ に対して profunctor の合成 $GF: A \multimap C$ を関手 $(y^\dagger G) \circ F: A \rightarrow \widehat{C}$ で定める.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \widehat{B} & \xrightarrow{y^\dagger G} & \widehat{C} \\
 & \nearrow F & \uparrow y & \nearrow G & \\
 A & & B & &
 \end{array}$$

圏 C に対して米田埋込 $y: C \rightarrow \widehat{C}$ が定める profunctor を $\text{id}_C: C \multimap C$ で表す. 左 Kan 拡張の性質から容易に分かるように $F: C \multimap D$ に対して $F \circ \text{id}_C \cong F, \text{id}_D \circ F \cong F$ である.

命題 3. $F: A \multimap B, G: B \multimap C$ を profunctor とするとき

$$GF(a) = \int^{b \in B} F(b, a) \times G(-, b).$$

証明. $P \in \widehat{B}$ に対して $y^\dagger G(P) = \int^{b \in B} \text{Hom}_{\widehat{B}}(y(b), P) \times Gb = \int^{b \in B} Pb \times Gb$ であるから $GF(a) = y^\dagger G(Fa) = \int^{b \in B} Fa(b) \times Gb = \int^{b \in B} F(b, a) \times G(-, b). \quad \square$

$F: C \rightarrow D$ を関手とする. このとき profunctor $F_*: C \multimap D, F^*: D \multimap C$ が

$$F_*(d, c) := \text{Hom}_D(d, Fc), \quad F^*(c, d) := \text{Hom}_D(Fc, d)$$

により定まる. つまり $F_*(c) = y \circ F(c) = F^{-1}y(c), F^*(d) \cong F^\dagger y(d)$ である.

A, B を小圏とする. $\text{cospan } A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ に対して profunctor $\Phi(F, G): A \multimap B$ が

$$\Phi(F, G) := G^* F_* \cong (G^\dagger y)(y \circ F) \cong y^\dagger (G^\dagger y) \circ y \circ F$$

により定まる.

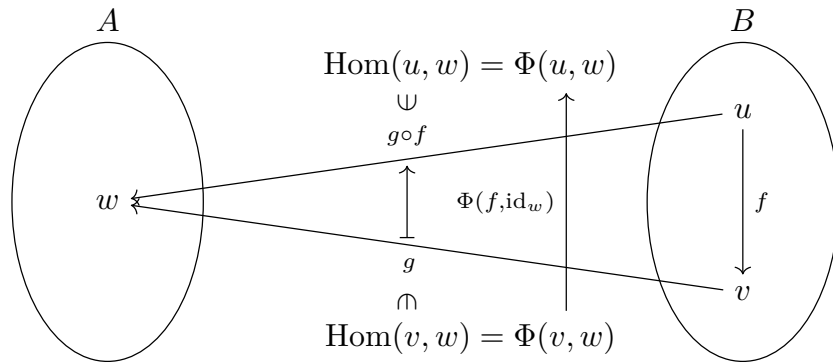
$$\begin{array}{ccccc}
 & & \widehat{C} & & \\
 & & \nearrow y & & \searrow y^\dagger(G^\dagger y) \\
 & & C & \xrightarrow{G^\dagger y} & \widehat{B} \\
 & \nearrow F & & & \\
 A & & & & B \\
 & & \nwarrow G & & \nearrow y
 \end{array}$$

ここで y が忠実充満であることより $y^\dagger(G^\dagger y) \circ y \cong G^\dagger y$ となるから結局 $\Phi(F, G) \cong (G^\dagger y) \circ F$ が分かる. よって $\Phi(F, G)(a) \cong G^\dagger y(Fa) \cong \text{Hom}_C(G-, Fa)$ となる.

逆に profunctor $\Phi: A \dashv\vdash B$ に対して cospan $T(\Phi) = (A \xrightarrow{F_\Phi} C_\Phi \xleftarrow{G_\Phi} B)$ を以下のよう
に定義することができる. まず圏 C_Φ を次により定める.

- $\text{Ob}(C_\Phi) := \text{Ob}(A) \sqcup \text{Ob}(B)$
- $\text{Hom}_{C_\Phi}(u, v) := \begin{cases} \text{Hom}_A(u, v) & (u, v \in A \text{ のとき}) \\ \text{Hom}_B(u, v) & (u, v \in B \text{ のとき}) \\ \emptyset & (u \in A, v \in B \text{ のとき}) \\ \Phi(u, v) & (u \in B, v \in A \text{ のとき}) \end{cases}$
- 射 $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ の合成 $g \circ f$ を次で定める.

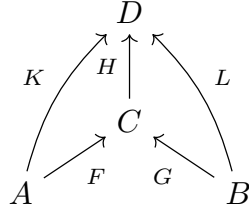
$$g \circ f := \begin{cases} g \circ f & (u, v, w \in A \text{ のとき}) \\ g \circ f & (u, v, w \in B \text{ のとき}) \\ \Phi(f, \text{id}_w)(g) & (u, v \in B, w \in A \text{ のとき. 下図参照}) \\ \Phi(\text{id}_u, g)(f) & (u \in B, v, w \in A \text{ のとき}) \end{cases}$$



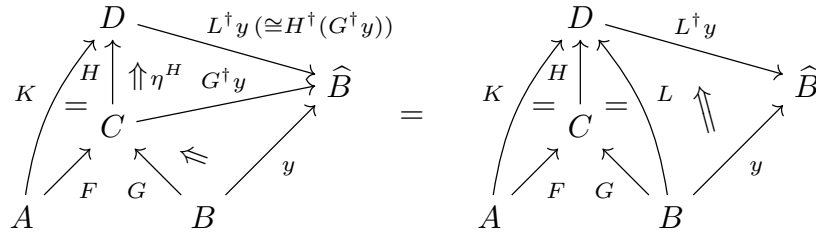
関手 $F_\Phi: A \rightarrow C_\Phi, G_\Phi: B \rightarrow C_\Phi$ を自然な埋込で定めれば $T(\Phi) \in \text{Cospan}(A, B)$ である.

命題 4. $\Phi: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ と $T: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ は関手となる.

証明. (Φ が関手となること) まず $\text{Cospan}(A, B)$ の射 H (次の図式を参照) を取る.

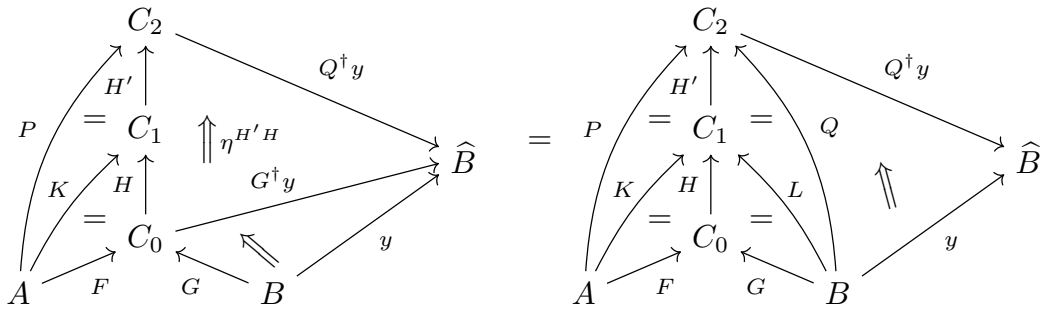


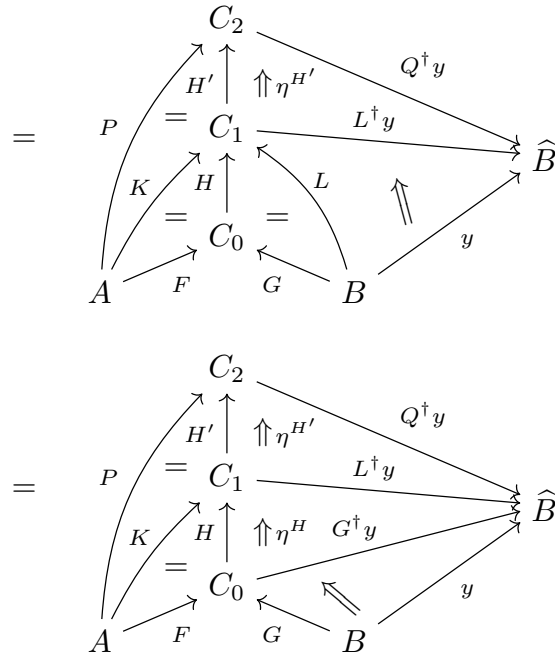
既に見た通り $\Phi(F, G), \Phi(K, L): A \multimap B$ は $\Phi(F, G) = (G^\dagger y) \circ F$, $\Phi(K, L) = (L^\dagger y) \circ K$ により得られる. Kan 拡張の性質 (「随伴関手定理」の PDF を参照) より, 次の図式の η^H を $\langle L^\dagger y, \eta \rangle$ が H に沿った $G^\dagger y$ の左 Kan 拡張となるように一意に取ることができる.



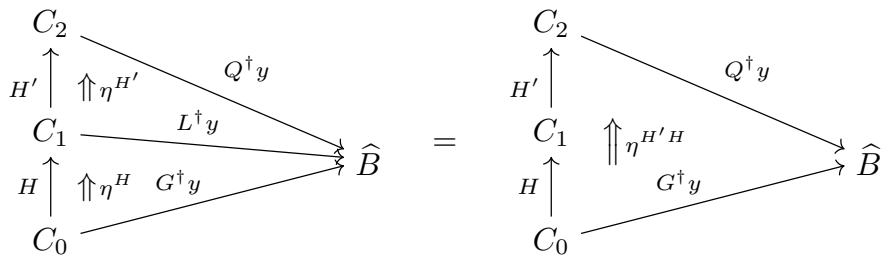
そこでこの η^H を使えば自然変換 $\Phi(H): \Phi(F, G) = (G^\dagger y) \circ F \Rightarrow (L^\dagger y) \circ K = \Phi(K, L)$ が得られる. この Φ は関手になる.

∴) まず $H = \text{id}$ の場合は $G = L$ となるから $G^\dagger y = L^\dagger y$ であり, 故に $\eta^{\text{id}} = \text{id}$ となるから $\Phi(\text{id}) = \text{id}$ である. 故に Φ が合成と交換することを示せばよい. そこで $(A \xleftarrow{F} C_0 \xrightarrow{G} B) \xrightarrow{H} (A \xleftarrow{K} C_1 \xrightarrow{L} B) \xrightarrow{H'} (A \xleftarrow{P} C_2 \xrightarrow{Q} B)$ を cospan の射とすると





だから普遍性により



となり $\Phi(H'H) = \Phi(H')\Phi(H)$ である.

(T が関手になること) $\mathbf{Prof}(A, B)$ の射 $\varphi: \Phi \Rightarrow \Psi$ に対して $T(\varphi): T(\Phi) \rightarrow T(\Psi)$ を定めるには, 対象 $a \in A, b \in B$ に対して写像 $T(\varphi): \text{Hom}_{C_\Phi}(b, a) \rightarrow \text{Hom}_{C_\Psi}(b, a)$ をうまく定めればよい. それには Hom_{C_Φ} の定義から $T(\varphi) := \varphi_{ba}: \Phi(b, a) \rightarrow \Psi(b, a)$ と定義することができる. これにより $T(\varphi)$ が関手になることを示せばよい. $T(\varphi)(\text{id}) = \text{id}$ は明らかなので $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ として $T(\varphi)(g \circ f) = T(\varphi)(g) \circ T(\varphi)(f)$ を示す.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか

(ii) $u, v \in B, w \in A$ の場合, 定義から

$$\begin{cases} T(\varphi)(g \circ f) & = \varphi_{uw}(g \circ f) \\ T(\varphi)(g) & = \varphi_{vw}(g) \\ T(\varphi)(f) & = f \end{cases}$$

であり, 一方 φ が自然変換だから $\varphi_{uw}(g \circ f) = \varphi_{vw}(g) \circ f$ である.

$$\begin{array}{ccc} \Phi(u, w) & \xrightarrow{\varphi_{uw}} & \Psi(u, w) \\ \Phi(f, \text{id}_w) \uparrow & & \uparrow \Psi(f, \text{id}_w) \\ \Phi(v, w) & \xrightarrow{\varphi_{vw}} & \Psi(v, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} g \circ f & \xrightarrow{\varphi_{uw}} & \varphi_{uw}(g \circ f) \\ \Phi(f, \text{id}_w) \uparrow & & \uparrow \Psi(f, \text{id}_w) \\ g & \xrightarrow{\varphi_{vw}} & \varphi_{vw}(g) \end{array}$$

(iii) $u \in B, v, w \in A$ の場合, 定義から

$$\begin{cases} T(\varphi)(g \circ f) & = \varphi_{uw}(g \circ f) \\ T(\varphi)(g) & = g \\ T(\varphi)(f) & = \varphi_{uv}(f) \end{cases}$$

であり, 一方 φ が自然変換だから $\varphi_{uw}(g \circ f) = g \circ \varphi_{uv}(f)$ である.

$$\begin{array}{ccc} \Phi(u, v) & \xrightarrow{\varphi_{uv}} & \Psi(u, v) \\ \Phi(\text{id}_u, g) \downarrow & & \downarrow \Psi(\text{id}_u, g) \\ \Phi(u, w) & \xrightarrow{\varphi_{uw}} & \Psi(u, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} f & \xrightarrow{\varphi_{uv}} & \varphi_{uv}(f) \\ \Phi(\text{id}_u, g) \downarrow & & \downarrow \Psi(\text{id}_u, g) \\ g \circ f & \xrightarrow{\varphi_{uw}} & \varphi_{uw}(g \circ f) \end{array}$$

以上により $T(\varphi)$ は関手であることが分かった.

これにより T が関手になることを示す. T の定義より $T(\text{id}) = \text{id}$ は明らかである. そこで $\varphi: \Phi \Rightarrow \Psi, \psi: \Psi \Rightarrow \Xi$ に対して $T(\psi \circ \varphi) = T(\psi) \circ T(\varphi)$ を示す. そのためには $a \in A, b \in B$ に対して $(\psi \circ \varphi)_{ba} = \psi_{ba} \circ \varphi_{ba}$ を示せばよいが, それは明らか. \square

命題 5. $T \dashv \Phi: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \mathbf{Cospan}(A, B)$

証明. 随伴であることを示すため, 自然な全単射

$$\varphi: \text{Hom}_{\mathbf{Cospan}(A, B)}(T(\Psi), \langle F, G \rangle) \rightarrow \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(A, B)}(\Psi, \Phi(F, G))$$

を定義する.

$\Psi \in \mathbf{Prof}(A, B), (A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B) \in \mathbf{Cospan}(A, B)$ を取る. $H: T(\Psi) \rightarrow \langle F, G \rangle$ を射とする. 即ち H は次を可換とする関手である.

$$\begin{array}{ccccc} & & C & & \\ & F & \nearrow & & \nwarrow G \\ & & H & & \\ & & \uparrow & & \\ A & & C_\Psi & & B \\ & F_\Psi & \nwarrow & & \nearrow G_\Psi \end{array}$$

可換性から $Ha = Fa$, $Hb = Gb$ である. よって関手 H から写像

$$\varphi(H)_{ba}: \text{Hom}_{C_\Psi}(b, a) = \Psi(b, a) \xrightarrow{H} \text{Hom}_C(Gb, Fa)$$

が得られる. これは $b \in B$, $a \in A$ について自然である.

∴) $g: b' \rightarrow b$, $f: a \rightarrow a'$ に対して次の左の図式

$$\begin{array}{ccc} \Psi(b, a) & \xrightarrow{H} & \text{Hom}_C(Gb, Fa) & & k & \xrightarrow{H} & Hk \\ \Psi(g, f) \downarrow & & \downarrow Gg \circ - \circ Ff & & \Psi(g, f) \downarrow & & \downarrow Gg \circ - \circ Ff \\ \Psi(b', a) & \xrightarrow{H} & \text{Hom}_C(Gb', Fa) & & g \circ k \circ f & \xrightarrow{H} & H(g \circ k \circ f) \end{array}$$

が可換であることを示せばよい. これは, $\Psi(g, f)$ が圏 C_Ψ における合成 $g \circ - \circ f$ と一致しているから, H の関手性により分かる.

よって自然変換 $\varphi(H): \Psi \Rightarrow \text{Hom}_C(G-, F\Box) = \Phi(F, G)$ が得られる. この φ は全単射 $\varphi: \text{Hom}(T(\Psi), \langle F, G \rangle) \rightarrow \text{Hom}(\Psi, \Phi(F, G))$ を与える.

∴) 単射であることは $\varphi(H)_{ba}$ の定義から明らかである. よって全射性を示せばよい. そこで $\theta: \Psi \Rightarrow \text{Hom}_C(G-, F\Box)$ を自然変換とする. このとき H を

- 対象 $x \in C_\Psi$ に対して $Hx := \begin{cases} Fx & (x \in A) \\ Gx & (x \in B). \end{cases}$
- 射 $f: u \rightarrow v$ に対して $Hf := \begin{cases} Ff & (u, v \in A) \\ Gf & (u, v \in B) \\ \theta_{ba}(f) & (u \in B, v \in A). \end{cases}$

と定義する. この $H: C_\Psi \rightarrow C$ は関手である.

∴) $H(\text{id}) = \text{id}$ は明らかなので $f: u \rightarrow v$, $g: v \rightarrow w$ として $H(g \circ f) = Hg \circ Hf$ を示す.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか

(ii) $u, v \in B$, $w \in A$ の場合, 定義から

$$\begin{cases} H(g \circ f) & = & \theta_{uw}(g \circ f) \\ Hg & = & \theta_{vw}(g) \\ Hf & = & Gf \end{cases}$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = \theta_{vw}(g) \circ Gf$ である.

$$\begin{array}{ccc} \Psi(u, w) \xrightarrow{\theta_{uw}} \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & g \circ f \xrightarrow{\theta_{uw}} \theta_{uw}(g \circ f) \\ \uparrow \Phi(f, \text{id}_w) & \uparrow - \circ Gf & \uparrow \Phi(f, \text{id}_w) \quad \varphi_{vw}(g) \circ Gf \\ \Psi(v, w) \xrightarrow{\theta_{vw}} \text{Hom}_C(Gv, Fw) & & g \xrightarrow{\theta_{vw}} \theta_{vw}(g) \\ & & \uparrow - \circ Gf \end{array}$$

(iii) $u \in B, v, w \in A$ の場合, 定義から

$$\begin{cases} H(g \circ f) = \theta_{uw}(g \circ f) \\ Hg = Fg \\ HfH = \theta_{uv}(f) \end{cases}$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = Fg \circ \theta_{uv}(f)$ である.

$$\begin{array}{ccc} \Psi(u, v) \xrightarrow{\theta_{uv}} \text{Hom}_C(Gu, Fv) & & f \xrightarrow{\theta_{uv}} \theta_{uv}(f) \\ \downarrow \Psi(\text{id}_u, g) & \downarrow Fg \circ - & \downarrow \Psi(\text{id}_u, g) \quad \downarrow Fg \circ - \\ \Psi(u, w) \xrightarrow{\theta_{uw}} \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & g \circ f \xrightarrow{\theta_{uw}} \theta_{uw}(g \circ f) \\ & & \uparrow Fg \circ \theta_{uv}(f) \end{array}$$

以上により H は関手であることが分かった.

このとき明らかに $HF_\Psi = F, G_\Psi H = G$ だから H は射 $T(\Psi) \rightarrow \langle F, G \rangle$ であり, $\varphi(H) = \theta$ である.

故に後は φ が $\Psi, \langle F, G \rangle$ について自然であることを示せばよい. その為に $\theta: \Psi \Rightarrow \Xi, M: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ とする.

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(T(\Xi), \langle F, G \rangle) \xrightarrow{\varphi} \text{Hom}(\Xi, \Phi(F, G)) & & \\ \downarrow M \circ - \circ T\theta & & \downarrow \Phi(M) \circ - \circ \theta \\ \text{Hom}(T(\Psi), \langle K, L \rangle) \xrightarrow{\varphi} \text{Hom}(\Psi, \Phi(K, L)) & & \end{array}$$

が可換であることを示す. $H: T(\Xi) \rightarrow \langle F, G \rangle$ として, まず右回りで送った先を考えると, その ba 成分は $(\Phi(M) \circ \varphi(H) \circ \theta)_{ba} = \Phi(M)_{ba} \circ \varphi(H)_{ba} \circ \theta_{ba} = \Phi(M)_{ba} \circ H \circ \theta_{ba}$ である.

一方左回りの ba 成分は $(\varphi(M \circ H \circ T\theta))_{ba} = M \circ H \circ T\theta = M \circ H \circ \theta_{ba}$ である. 故

に $\Phi(M)_{ba} = M$ であることを示せばよい. □

次に $\text{span } A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ に対して profunctor $\Psi(F, G): A \dashv\vdash B$ が

$$\Psi(F, G) := G_* F^* \cong (yG)(F^\dagger y) \cong y^\dagger(yG) \circ F^\dagger y = F^\dagger(yG)$$

により定まる.

$$\begin{array}{ccc}
 & \widehat{C} & \xrightarrow{y^\dagger(yG)} \widehat{B} \\
 F^\dagger y \nearrow & \uparrow y & \swarrow y \\
 A & \xleftrightarrow{\quad} & B \\
 \nwarrow F & \downarrow C & \nearrow G
 \end{array}
 =
 \begin{array}{ccc}
 & & \widehat{B} \\
 F^\dagger(yG) \nearrow & & \nearrow y \\
 A & \xleftrightarrow{\quad} & B \\
 \nwarrow F & \downarrow C & \nearrow G
 \end{array}$$

逆に, $S := \downarrow \circ T$ と定義すれば, profunctor $\Phi: A \dashv\vdash B$ に対して $\text{span } S(\Phi) \in \text{Span}(A, B)$ を定義することができる.

$$\begin{array}{ccc}
 & C_\Phi & \\
 F_\Phi \nearrow & & \nwarrow G_\Phi \\
 A & \xleftrightarrow{\quad} & B \\
 \nwarrow F^\Phi & & \nearrow G^\Phi \\
 & G_\Phi \downarrow F_\Phi & \\
 & \parallel & \\
 & C^\Phi &
 \end{array}$$

命題 6. 圏 C^Φ は以下のようなになる.

- $\text{Ob}(C^\Phi) = \{\langle a, b, f \rangle \mid a \in A, b \in B, f \in \Phi(b, a)\}$
- $\langle a_0, b_0, f_0 \rangle, \langle a_1, b_1, f_1 \rangle \in \text{Ob}(C^\Phi)$ に対して

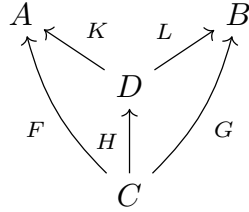
$$\text{Hom}_{C^\Phi}(\langle a_0, b_0, f_0 \rangle, \langle a_1, b_1, f_1 \rangle) = \left\{ \langle g, h \rangle \mid \begin{array}{l} g: a_0 \rightarrow a_1, h: b_1 \rightarrow b_0, \\ \Phi(h, g)(f_0) = f_1 \end{array} \right\}$$

□

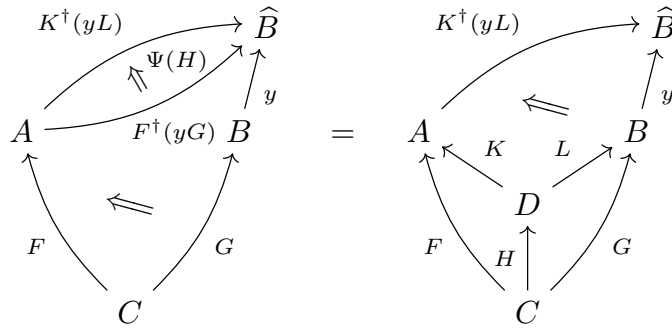
命題 7. $\Psi: \text{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ と $S: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は関手となる.

証明. まず S については定義より関手である. 従って Ψ が関手であることを示せばよい.

そのために $\text{Span}(A, B)$ の射 H (次の図式を参照) を取る.

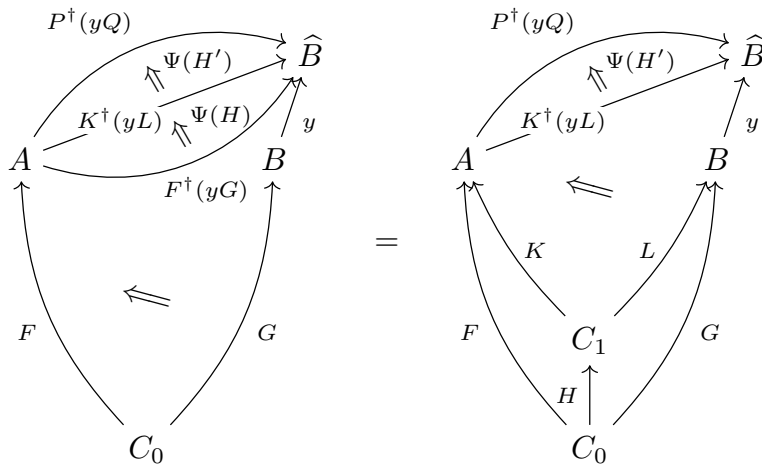


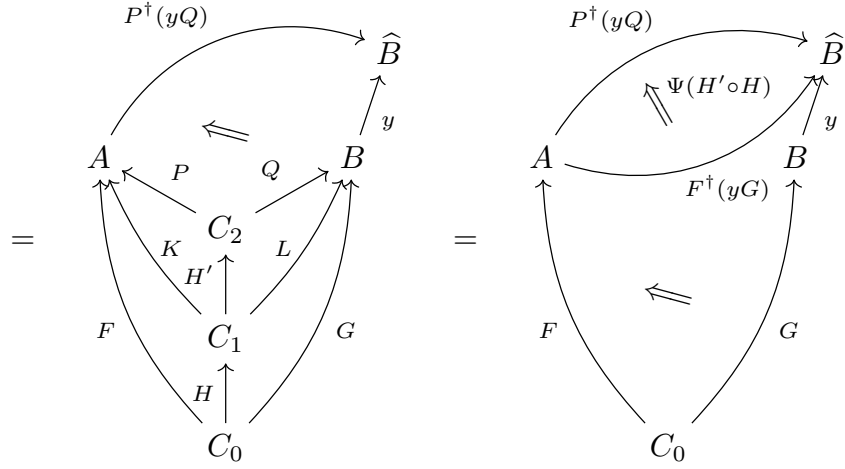
$\Psi(F, G), \Psi(K, L): A \rightrightarrows B$ が $\Psi(F, G) = F^\dagger(yG)$, $\Psi(K, L) = K^\dagger(yL)$ により得られる. よって左 Kan 拡張の普遍性により自然変換 $\Psi(H): \Psi(F, G) \Rightarrow \Psi(K, L)$ が得られる.



これにより Ψ が関手となることを示そう.

まず明らかに $\Psi(\text{id}) = \text{id}$ である. よって Ψ が合成と交換することを示せばよい. そこで $(A \xleftarrow{F} C_0 \xrightarrow{G} B) \xrightarrow{H} (A \xleftarrow{K} C_1 \xrightarrow{L} B) \xrightarrow{H'} (A \xleftarrow{P} C_2 \xrightarrow{Q} B)$ を span の射とすると





より普遍性から $\Psi(H' \circ H) = \Psi(H') \circ \Psi(H)$ が分かる. □

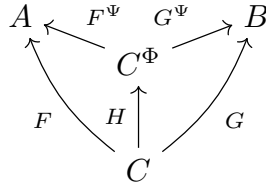
命題 8. $\Psi \dashv S: \text{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$

証明. 随伴であることを示すため, 自然な全単射

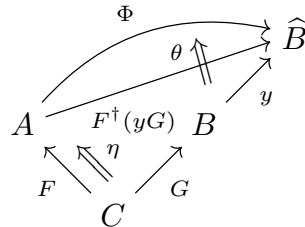
$$\varphi: \text{Hom}_{\text{Span}(A, B)}(\langle F, G \rangle, S(\Phi)) \rightarrow \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(A, B)}(\Psi(F, G), \Phi)$$

を定義する.

$(A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B) \in \text{Span}(A, B)$, $\Phi \in \mathbf{Prof}(A, B)$ を取る. $H: \langle F, G \rangle \rightarrow S(\Phi)$ を射とする. 即ち H は次を可換とする関手である.

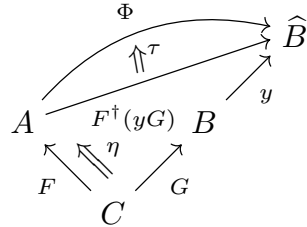


$c \in C$ に対して $Hc = \langle Fc, Gc, \theta_c \rangle$ ($\theta_c \in \Phi(Gc, Fc)$) と書ける. ここで米田の補題により $\Phi(Gc, Fc) \cong \text{Hom}(y(Gc), \Phi(-, Fc))$ である. 故に H は自然変換 $\theta: y \circ G \Rightarrow \Phi \circ F$ を定める.



故に Kan 拡張の普遍性により自然変換 $\varphi(H): \Psi(F, G) \cong F^\dagger(yG) \Rightarrow \Phi$ が得られる. これは全単射 $\varphi: \text{Hom}(\langle F, G \rangle, S(\Phi)) \rightarrow \text{Hom}(\Psi(F, G), \Phi)$ を与える.

∴) 単射性は明らかだから全射性を示す. そのために $\tau: \Psi(F, G) \Rightarrow \Phi$ を自然変換とする. このとき $\theta := \tau_F \circ \eta$ と定義し (次の図式を参照),



H を

- 対象 $c \in C$ に対して $Hc := \langle Fc, Gc, \theta_c \rangle$
- 射 $f: c \rightarrow c'$ に対して $Hf := \langle Ff, Gf \rangle$

で定義する. もしこの H が関手 $C \rightarrow C^\Phi$ ならば, 明らかに H は射 $\langle F, G \rangle \rightarrow S(\Phi)$ であり $\varphi(H) = \tau$ である. H が関手であることは容易に示すことができる.

これは $\langle F, G \rangle, \Phi$ について自然だから $\Psi \dashv S$ である. □

定義より $\text{cospan } A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ に対して $S \circ \Phi(F, G) = G \downarrow F$ である. また cospan の射 $H: (A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B) \rightarrow (A \xrightarrow{K} D \xleftarrow{L} B)$ に対して $S \circ \Phi(H): G \downarrow F \rightarrow L \downarrow K$ は $\downarrow H$ に一致する. 故に $S \circ \Phi = \downarrow$ である. そこで $\uparrow := T \circ \Psi$ と定義すれば

$$\text{Span}(A, B) \xrightleftharpoons[\downarrow]{\uparrow} \mathbf{Prof}(A, B) \xrightleftharpoons[\Phi]{T} \text{Cospan}(A, B)$$

より $\uparrow \dashv \downarrow$ となる. 以上により

定理 9. 関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は左随伴を持つ. □

参考文献

- [1] Jean Bénabou, Distributors at Work, <http://www.mathematik.tu-darmstadt.de/~streicher/>